



極地研ニュース100

1990年12月

極地研ニュース100号をかえりみて

川口 貞 男

「極地研ニュース」100号をお送りすることになりました。極地研究所の発足は昭和48年9月ですが、極地研ニュース第1号はその1年後の昭和49年8月で、以来2ヶ月毎、年6回の発行を続けて参りました。村山初代編集委員長から2代楠、3代星合の各先輩を経て私が4代目となりますが、編集実務担当の庶務係長の鈴木さんも4代目です。先輩の敷かれた路線をたゞ無事に走れました事に対し、改めて執筆者各位に御礼を申し上げます。

発刊に際し、当時の所長永田先生は、極地に関する研究所であるとともに南極観測実施の中核機関としての当研究所の活動状況、極地研究に関する話題及び内外の極地研究関係の情報などを広く大学、研究所の研究者その他の関係者にお知らせするとともに、皆さんのご意見を掲載し関係者相互の意見交換を密にし、極地研究の発展の一助にしたい、と述べております。

研究所の研究活動についてはシンポジウム等の案内、内容報告のほか興味深い研究成果をトピックとして伝えて来ました。南極観測事業については各隊次の計画、隊長の抱負、観測報告や、観測隊便りとして現況を生々しく伝えて来ました。基地の気象資料は15号から始めたものですが、これは南極研究の国際的な集りであるSCAR（南極研究科学委員会）で各国基地の気候値をなるべく早く知らせ合う事となり、これを使うこととしたものです。従って「極地研ニュース」は各国の極地研究所にも送られているのです。

囲み記事の「極地豆事典」は南極の自然や生物、観測隊の生活、国際協力のしくみなどを写真を使って解説して来ました。今回カラー写真を使い「南極科学館」（国立極地研究所編、古今書院）という本にまとめて出版しました。この様には、当初方針に沿って編集して来ましたが、所外の先生方からの意見が不足しているように思います。今後この点を充実し、ご期待に応え得るものにして行く所存でございますので宜しく御協力下さい。

（筆者：国立極地研究所企画調整官）

南極海洋生物資源保存委員会第9回年次 会合に出席して

福地 光 男

昨年の第8回会合に続き（極地研ニュース第94号参照）、平成2年10月22日～11月2日の間、オーストラリアのホバート市において、標記会合（CCAMLR）が開催された。会合は大きく分けて、前半の科学委員会と後半の本委員会とに分けられる。今回は科学委員会の3日目後半からの出席であったが、水産庁の出席者からの情報も含めて、以下に科学委員会の報告をまとめた。

科学委員会への出席は、CCAMLR条約加盟国として、委員会構成国である17か国及びEEC（欧州経済共同体）から、また、オブザーバー出席国である3か国からであった。構成国であるフランスとポーランドからは出席者がいなかった。その他、オブザーバーとして国際機関であるIWC（国際捕鯨委員会）とSCAR（南極研究科学委員会）からの出席があった。前回、オブザーバーとして科学委員会の全体会議に出席した民間の環境保護団体であるASOC（南極大陸及び南大洋の環境保護連合）については、今回も出席を希望していたが、科学委員会として満場一致で出席を認める結論が得られなかったため、ASOCからのオブザーバー出席者はなかった。日本からは水産庁国際課後藤暁参事官を代表とし8名が出席した。

科学委員会は10月21日に非公式会合をもった後、10月22～26日、及び、報告の採択がずれこんだため10月29日までかかった。

1989年7月1日から1990年6月30日までの1年間に、CCAMLR海域にてナンキョクオキアミ漁業を行った国は、チリ（4,527トン）、ドイツ（396トン）、日本（62,179トン）、韓国（4,040トン）、ポーランド（1,275トン）及び、ソ連（302,376トン）の6ヶ国であった。総漁獲量は374,793トンであり、前年に比べ約5%減少した。これまで過去2年間、主要漁場であった48.1区（南極半島域）と48.3区（サウス・ジョージア区）での漁獲量が減少し、48.2区（サウス・オークニー区）にて

■国立極地研究所発行 ■〒173 東京都板橋区加賀 1-9-10 ☎(03)962-4711(代表)

1990年12月20日発行 隔月1回20日発行

漁獲増がみられ、とりわけソ連が前年に比べ約14万5千トンも多く漁獲した。これは前回の科学委員会で48.3区への漁獲の集中がオキアミ捕食動物の生態に影響を及ぼすことへの懸念を反映したものかもしれない。

本委員会から科学委員会に出されている質問事項、すなわち、48.3区のオキアミ資源について①資源量と生産能力の見積り、②オキアミ漁業制限を含む可能な管理措置、③上記①と②が不可能な場合にどのような情報が必要か、に対しては、現時点ではオキアミの死亡率、ターゲット強度、海域への移入・移出量の見積りが困難であるとした。また、前回にひきつづきオキアミ漁業に対する予防的制限の必要性が再度提案されたが、日本とソ連がいまだ時期尚早であるとした。

イカ資源についてイギリスより調査結果の報告があり、ゾウアザラシの餌生物の94%がミナミオオスルメ (*Martialia hyadesi*) によって占められ、この事によってゾウアザラシのミナミオオスルメの年間捕食量を推定すると約33万トンと見積もられた。南極海にはかなりのイカ資源の存在が示唆された。

大型捕食動物についてのモニタリング標準法の改訂が完了し、その方法がまとめられた。これにより今後、各種大型動物のモニタリング報告が義務づけられることになるものと思われる。また、陸上の3ヶ所について、モニタリング地域として登録、保護することが提案された。すなわち、ブリッツ湾のマグネティック諸島についてはオーストラリアにより提案され、サウス・シェトランド諸島のケープシレエフとリビングストン島はチリ、米の提案、及び、サウス・シェトランド諸島のシール島はアメリカによる提案であった。

魚類資源に関連し、はえなわ漁業による混獲の影響のため、アホウドリの個体数が減少しているとの報告があった。また、浮魚流し網漁業禁止の声が強くなり、国連全体会議決議の支持がなされた。底引きトロール漁業による底生生物群集への影響についての意見交換がなされた。さらに、梱包材や廃棄漁具等のマリン・デブリスによる海産動物の偶発的死亡の例が報告された。南極半島域での油流出事故追跡調査として、南極パーマー基地がアメリカ NSF (全米科学財団) の長期的モニタリングプログラム地域とされた。

これまで科学委員会の議長であった I. Everson 博士の任期満了にともない、次回からの委員長にノルウェーの Ole J. stvedt 博士が選出された。

次回、第10回の CCAMLR 会合については、チリからの要望もあったが、結局はこれまで通りホバートにおいて1991年10月21日から11月1日の間開かれることとなった。

(筆者：国立極地研究所生理生態学研究部門助教授)

第11回南極地学シンポジウム

第11回南極地学シンポジウムは「しらせ」の出航を目

前にした11月8日と9日の2日間の日程で、極地研究所講堂で行われた。昨年同様、南極大陸及び南極に関連する地域について、地質、地球物理、地形、地球化学等の研究成果の発表と、それ等についての活発な討議が行われた。参加者数は延べ79名で、35の講演が行われた。

第一日目は、星合極地研究所長の挨拶に始まり、南極海域の地学、セールロンダーネ山地の地学 (I)、それに西南極の地学について17講演が行われた。講演終了後は講義室で、例年通り懇親会が行われ、質疑応答が再び行われた。第二日目は、昭和基地周辺の地学、セールロンダーネ山地の地学 (II)、それにゴンドワナランドの地学について合計18の研究成果が発表された。

南極海域の地学では、しらせによる船上重力測定の実状や、第30次隊により得られた地磁気異常についての研究から、南インド洋からエンダービーランド沖にかけての複雑な海底物理構造が明らかになった。そして「しらせ」による地磁気や重力の調査がインド洋の形成と発展の歴史を知る上できわめて重要であることが再認識された。

あすか基地が開設されて、今年で5年になる。この間、セールロンダーネ山地の地球科学的研究は飛躍的に進歩した。今年のシンポジウムでは、ヘリコプターオペレーションにより、今まで陸路近寄ることの出来なかったセールロンダーネ山地南部地域の地質調査結果、変成年代学に関する考察と古地磁気学的研究成果、それに山地に厚く堆積するモレーンの風化と分布に関する研究が報告された。

西南極の地学では、ドライバレー地域の有機成分が、ゴンドワナ時代から現在までの微生物の混合物として説明されることや、エレバス火山についての岩石学、地震学それに温度変化について報告された。また南極半島地域については、永久凍土形成や氷楔の化学組成、同位体特徴について報告された。

昭和基地周辺の地学では、定常観測で得られた地震、潮汐の結果やみずほ高原の重力異常図などが報告された。大陸氷河後退により引き起こされる地殻の隆起と昭和基地で観測された地震の関係について、耳目を集めた。

ゴンドワナランドの地学では、インドプレートと南極大陸の関係について、鉱物学、構造地質学の方面的研究結果について報告され、インドやスリランカがエンダービーランドとかつてゴンドワナ大陸の一部として、密接に接続していた可能性が報告された。

今年度の特徴としては、地球物理学に関する発表が多く、それに対し地質の論文数が少なかった。これは極地研究所の地質研究者の内、1名が「あすか基地」で越冬中、もう一名がシンポジウム直前まで外国出張中であったことから、外部への働きかけが不十分だった可能性が考えられる。今年度は、一講演20分の待ち時間で、2日間に35講演を行なう事が限度であった。今後講演数の増加に対処するため、日数の延長、ポスターセッションの導入や講演の選定などの手段を考えておく必要がある。

本年のシンポジウムでは、以上のように広範囲にわた

って興味深い南極の地球科学の研究成果が報告された。これには極地研の関係者のみならず、南極観測に携わった多くの隊員の協力によって得られた成果である。ここで関係者に謝辞を述べたい。

第13回極域生物シンポジウム

第13回極域生物シンポジウムが平成22年12月5日、6日の2日間、極地研の講堂において開催された。今回のシンポジウムは2日間で、延べ160名の参加があった。そのうち、口頭による発表は12件、展示による発表は53件であった。また、発表の合間をぬって、海水圏生物総合研究と、BIOTAS（南極陸上生態系の研究）プログラムおよび北極域の陸上生物研究についての二つのワークショップも行われた。

口頭発表が少なかったのは発表形式が従来のものと趣を異にしていることによる。すなわち、年々、発表件数が増えてきてはいるが、3日間でも一人当りの発表時間が15分程度に限られるので十分な発表と質疑応答が出来ない難点があった。生物研究グループではこの問題を解決すべく検討してきた。そこで、今回の口頭発表にはテーマ性を持たせ、従来の一般講演はすべて展示発表とした。すなわち、海洋生物のセッションでは、『海水域の生物過程』をテーマとして7件、陸上生物セッションでは、『湖沼の環境と生物』をテーマとして、5件の口頭発表が用意され、発表時間は一人30～40分が与えられた。一方、展示発表は海洋生物セッションで36件、陸上生物セッションで17件であったが、展示物の前で一人10分間の発表時間が与えられた。

このような形式を取ったことにより、果して能率のよい発表になるかどうかは多少心配があったが、実際は口頭および展示による発表共々予想以上によい反響があり、まずは成功裡に終わったと言ってよいだろう。

口頭発表のテーマが両セッションとも水域を場としているため、共通の関心が集まり、参加者の増加があったと思われる。また、第11回シンポジウムあたりから海洋では北極海およびその隣接海域、陸上では北極域、高山域における研究が多くなり、今回もその傾向は強く表れていた。これは国際的にますます北極域の研究の重要性が強くなっているからであろう。

シンポジウムへの海外からの参加者は、今回も5か国、7名を数え、そのうち、5名が口頭による発表を行った。また、展示による海外からの発表は9件におよんだ。したがって、海外からの参加者の多かった海洋生物セッションでの口頭発表全部と、陸上の一部は英語で発表することになった。今後も今回のような発表形式を取る場合、より国際的な色合いの濃いシンポジウムになっていくことが予想される。

また、2日目の昼休みには、参加者の一人であるR. ワートン博士（NASA, USA）が極地研に寄贈したビデオ『Life on Ice, Antarctica and Mars』を一時間にわ

たって放映した。これは今回のテーマによく合った内容であったので、シンポジウムが一層盛り上がったことは言うまでもない。

▶来訪者◀

7月11日～7月13日 大竹 武 (Dr. OHTAKE, T. アラスカ大学地質学研究所名誉教授)

7月11日～7月15日 崔 孝 (Dr. Hyo Choi 国立江陵大学東海岸地域研究所長・(教授))

7月11日～7月18日 Prof. DECLEIR, H. (ブリュッセル自由大学教授)

7月13日 Prof. ALEAN, W. (ニューヨーク州立工科大学教授)

7月13日及び7月19日 Dr. AHMAD, M. M. (インドスリナガル工業大学上級講師)

7月24日 Mr. GAUR, V. K. (インド海洋開発庁長官)

7月30日～8月1日 郭 琨 (Mr. Guo Kun 中国国家南極考察委員会弁公室主任)

顔 基 德 (Dr. Yan Qide 中国極地研究所副所長)

李 占生 (Dr. Li Zhansheng 中国国家南極考察委員会弁公室国際部副部長)

7月30日～8月6日 万国才 (Dr. Wan Guocai 中国国家南極考察委員会技術研究部長 (高級工 程師))

山 广林 (Dr. Shan Guanglin 中国国家海洋局主任研究官 (高級工 程師))

張 炳炎 (Prof. Zhang Bingyan 上海船舶研究所教授)

郭 明川 (Prof. Wu Mingchuan 上海船舶研究所教授)

李 惠珍 (Dr. Li Huizhen 上海船舶研究所主任研究官)

李 碯碯 (Dr. Li Beibei 上海船舶研究所研究官)

8月5日～8月11日 李 瑞宗 (Dr. Ray-tzong Lee 台湾輔仁大学講師)

8月7日～8月10日 Dr. PARK, Y. (カリフォルニア工科大学ジェット推進研究所主任研究員)

8月23日～8月24日 Prof. TRIPP, R. (ワシントン大学海洋学部教授)

8月26日～8月29日 Prof. FRASER, B. (オーストラリアニューキャッスル大学教授)

8月26日～8月30日 Prof. WIT, D. (ケープタウン大学地質学部教授)

8月26日～9月1日 Prof. BERING, E. A. (米国ヒューストン大学教授)

8月27日 Prof. GORDON, A. L. (コロンビア大学ラモ

ント・ドーティー地質観測所教授)

- 9月3日～11月20日 Dr. ZWALLY, H. J. (米国ゴダード宇宙研究所主任研究員 (海洋・雪氷室長))
- 9月7日～9月11日 高 美 欣 (Prof. Meiqing Gao 地球物理研究所中国科学院アカデミー所長)
- 9月8日～9月11日 車 建国 (Mr. Jianguo Che 地球物理研究所中国科学院アカデミー主任)
- 9月10日～9月16日 Dr. OWEN, C. J. (英国帝国学院研究員)
- 9月14日～9月17日 Dr. HEINTZENBERG, J. (ストックホルム大学気象学教室助教授)
- 9月14日～9月28日 Dr. FERRARI, F. (米国スミソニアン自然史博物館海洋生物センター主任研究員)
- 9月14日～9月15日 Prof. BRADLEY, B. (米国メリーランド大学生物科学部教授)
- 9月17日～9月20日 Dr. FELDSTEIN, Y. I. (ソ連科学アカデミー地球磁気・電離圏電波伝搬研究所 (IZMIRAN) 研究員)
- 9月20日～9月23日 Prof. BACILA, M. (ブラジルパラナ大学獣医学大学院学部長)
- 9月21日～9月22日 Dr. RAMADEVI, C. (インドナガルジュナ大学動物学部助手)
- 9月21日～9月23日 Dr. GODHANTARAMAN, N. (インドアナマロイ大学海洋生物学部助手)
- 9月22日～9月24日 Dr. VENKATESWARAN, K. (インド海洋バイオテクノロジー研究所主任研究員)
- 9月23日～9月24日 Dr. DAHMS, H. U. (ドイツオールデンブルグ大学生物学部助手)
- 9月28日～9月29日 Prof. MATHISEN, O. A. (アラスカ大学漁業海洋科学ジュノーセンター)
- 10月1日～10月2日 胡 歆陵 (Prof. HU Huan Ling 中国科学院安徽光学精密器械研究所大気光学部長)
- 10月3日～10月9日 Prof. ALEXANDER, V. (アラスカ州立大学教授, 海洋学研究所長, 水産海洋学校長)
- 10月26日～10月27日 板垣和彦 (Dr. ITAGAKI, K. 米国陸軍寒地工学研究所物性物理研究部長)
- 10月29日 Prof. EGELAND, A. (オスロ大学教授)
- 11月6日～11月7日 Mr. SAUVADET, P. (北海道大学水産学部研修生)
- 11月17日～11月18日 Dr. PIPER, S. C. (カリフォルニア大学スクリプス海洋研究所助教授)
- 11月18日～12月7日 Dr. CLAUSEN, H. B. (コペンハーゲン大学地球物理研究所)
- 11月19日 Dr. BETTERIDGE, G. (ニュージーランド科学産業省研究部長)
- Dr. LOWE, D. (ニュージーランド科学産業省研究官)
- Dr. MATTHEWS, A. (ニュージーランド科

学産業省研究官)

Dr. CLARKSON, T. S. (ニュージーランド気象局研究部長)

Mr. COOPER, H. (ニュージーランド大使館二等書記官)

11月22日 Dr. WELLER, G. (アラスカ大学地球物理研究所副所長)

12月17日～12月19日 Dr. GLANDALL, I. (シェフィールド大学動植物科学学部助教授・基礎生物学研究所客員研究員)

第33次観測隊長・副隊長決まる

第97回南極地域観測統合推進本部総会が11月13日東條会館で開催され、第33次観測隊長及び副隊長が次のとおり決定した。



○隊長 (兼越冬隊長)

福地 光男

昭和22年11月30日生

国立極地研究所研究系助教

授
極地歴：【南極地域観測隊】

第18次夏隊

第20次夏隊

第23次越冬隊

第27次夏隊

【外国基地】

アルゼンチン (アルミランテ・ブラウン基地)

昭和50年11月～

昭和51年3月



○副隊長 (兼夏隊長)

佐野 雅史

昭和16年5月17日生

国立極地研究所事業部観測協力室設営総括係長

極地歴：【南極地域観測隊】

第10次夏隊

第13次越冬隊

第21次夏隊

第24次夏隊

第26次夏隊

第27次越冬隊

第31次夏隊 (副隊長兼夏隊長)

平成2年12月1日付け人事異動

【配置換】

国立極地研究所教授 江尻全機 (国立極地研究所
情報科学センター長 (併 教授研究系)
任)

国立極地研究所教授 平澤威男
情報科学センター長 (併
任解除)

国立極地研究所助教授 佐藤夏雄 (国立極地研究所
研究系 助教授情報科学セ
(超高層物理学第一研究 ンター)
部門)

【転出】

北海道教育大学教授 西尾文彦 (国立極地研究所
教育学部釧路分校 助教授資料系)

観測隊便り

昭和基地

11月前半の天候はぐずつき気味であったが、後半から強い高気圧に覆われ晴天に恵まれた。この高気圧の張り出しにより浮氷域にも変化が現われ、水開きが各所に見られるようになった。計画されていた野外観測もほぼ全てを終了し、隊の活動は基地とその周辺を中心としたものになった。基地では通常の観測、設営以外に夏の受入れ準備として除雪、持ち帰り物品の整理などの作業を開始した。除雪作業は10月後半から大型ブルドーザ数台を投入して行われて来たが、まだ終了していない。しかし建物周辺は砂まきを行って融雪を促しているため、残雪は目に見えて減少している。このまま晴天が続き、暖かくなってくれば雪解けも順調に進み、第32次隊の受け入れや、12月上旬に予定している建物外壁塗装作業についても支障なさそうである。

観測部門、設営部門ともに計画を順調に消化しているが、これまでの仕事に夏作業が加わり各部門とも忙しい毎日を送っている。

あすか観測拠点

11月に入り、春から夏へと急速に移り変わった月であった。バルビエン方面への地質・隕石調査旅行の前半は強風のために苦しまれたが、後半は真夏を思わせる好天のため順調に経過した。4人となった基地では、観測と基地の維持作業の傍ら、第32次隊の受け入れ準備作業を進めた。途中、冷凍庫用冷凍機の故障が発生し貯蔵されていた冷凍食品への影響が心配されたが、国内と連絡を取り合い復旧させることができた。国内とのファクシミリ通信という迅速な通信手段を備えていることが大き

な助けになったと言えるだろう。

定常観測は順調に進み、上旬には懸案であった新気象測風塔が立てられた。地質・隕石調査旅行では、RY167付近まで南下し、裸氷原での隕石探査を行った。

越冬交代も間近に迫り、帰り支度も始まったが、最後まで気を抜くことがないよう気を引きしめている。

第32次南極地域観測隊出発

第32次南極地域観測隊 (國分征隊長以下55名、オーストラリアのフリマントル港からベルギーの交換科学者2名が乗船) を乗せた観測船「しらせ」は、11月14日(水) 午前11時家族をはじめ、関係者多数の見送りの中、東京港晴海埠頭から南極へ向け出発した。

第32次隊は、12月下旬に昭和基地に到着し、建築及びポーラパトロール気球観測の隊員と一部の物資を下した後、ブライド湾へ向い、あすか観測拠点の越冬隊員8名及びセールロンダーネ山地調査のための隊員8名と96tの物資を輸送する。1月上旬には再び昭和基地へ向い、830tの物資を輸送するとともに、昭和基地整備計画の準備作業及び重力計設置のための諸作業を行う。

観測面では、第31次隊に引き続き定常観測を行うほか、研究観測では宙空系の「ポーラパトロール気球による超高層大気観測」、雪氷・地学系の「第Ⅱ期東クイーンモッドランド地域の雪氷・地学研究計画」気水圏系の「南極域における気候変動に関する総合研究」、生物・医学系の「昭和基地周辺の環境モニタリング」などを行う。

また、第31次隊と第32次隊の越冬交代は2月上旬を目途に行う。その後、「しらせ」はブライド湾へ回航し、セールロンダーネ山地の夏期調査隊を乗船させた後、アムンゼン湾及びケーシー湾の沿岸露岩域においての地学、生物の野外観測や海洋観測を行いつつ、3月上旬に南極圏を離れオーストラリアのシドニーに寄港、4月13日東京に帰港する予定である。

なお、第31次越冬隊員及び第32次夏隊員は、3月28日シドニーから空路帰国する。



南極月別気象資料 (Monthly Climatic Data for Japanese Antarctic Stations)

	昭和基地 (Syowa: 89532)		あすか観測拠点 (Asuka: 89524)	
	9 月 (Sep.)	10 月 (Oct.)	9 月 (Sep.)	10 月 (Oct.)
平均気温 (Mean temp.) (°C)	-23.5	-11.3	-27.6	-18.6
最高気温 (Max. temp.) (°C)	-7.5	-1.4	-17.4	-11.1
最低気温 (Min. temp.) (°C)	-35.7	-28.6	-45.7	-32.2
平均気圧・海面 (Mean pressure, sea level) (mb)	978.7	985.6	860.6	870.2
			(station pressure)	
平均蒸気圧 (Mean vapour pressure) (mb)	0.6	2.0		
平均相対湿度 (Mean relative humidity) (%)	53.0	73.0		
平均風速 (Mean wind speed) (m/s)	5.2	6.5	12.6	14.3
最大風速・10分間平均 (Max. wind speed, 10-min. mean) (m/s)	28.2 (21, NE)	31.1 (12, NE)	25.4 (26, ESE)	33.0 (12, SE)
瞬間最大風速 (Gust) (m/s)	35.2 (21, NE)	38.9 (12, NE)	30.9 (26, ESE)	42.8 (11, ESE)
平均雲量 (Mean cloud cover) (1/10)	4.1	7.7		
快晴日数 (Number of clear days)	10	3		

【極地豆事典】

湖底の蘚類



ラングホブデ雪鳥池の底に生育する蘚類

南極の露岩域に生育する蘚類は南極全体で約100種程度、そのうち昭和基地周辺ではわずか7種が見つかるに過ぎない。そのほとんどの生育環境は川や池などの水辺か雪のふきだまりの周りなどである。

南極の池や湖の底ではどうだろうか。日本等の中緯度地域では蘚類が湖沼の表面に浮いていたり、川床や池の底に繁茂していることはそう珍しいことではないからである。

南極ではIGY(1957—1958)の年に、ソ連の研究者が最初に湖沼の中の蘚類に注目した。すなわち、1959年クイーンマリーランドのバンガーヒルズの水深約35メートルの池の底から蘚類を見つけ、一新種 *Bryum korotkeviciae*, *B. k.* var. *hollerbachii* を報告した。その後(1964)も、クイーンモッドランドのシルマッヘル湖の水深30メートルの底からやはり新種 *Plagiothecium simonovii* を報告した。最近(1983)になってもサウスビクトリアランドのドライバレー、バンダ湖の水深30メートルの湖底から *Bryum algens* (南極特産種とされているが疑問が多い)が見つかった。

これらの報告により、南極でも特に東南極の湖底生物が注目されるようになってきた。昭和基地周辺では第16次隊(1975—1976)によって、スカルプスネスの水深約5～6メートルの湖底からそれまでに昭和基地からは未知な蘚類が採集された。その仮根や葉腋には特殊なむかごの様な無性芽がたくさん付いていたが、葉の発達が悪く、*Bryum* sp. あるいは *Dicranella* sp. であろうとされ、同定は保留されてきた。その採集後約15年経過した第29次隊は、再び同じ蘚類を採集することに成功し、植物体のよく発達した生材料をたくさん得ることができた。この蘚類の詳しい分類学的処理は研究中であるがどうやら南極大陸ではまだ報告されていない種かあるいは新種として記載する必要のあるもののようだ。このように南極の露岩域に無数に散在する淡水湖、塩湖、あるいは大陸氷縁に作られる夏でも氷が解けない氷湖などにはどんな生物が生息しているのかはまだほとんど解っていない。